

63. 近代日本の赤十字：人道概念の形成過程と第二次世界大戦時救援活動を中心に

東京大学 大学院経済学研究科 特任研究員 鈴木 路子

概要

本研究では、トランスナショナル・ヒストリー（越境する歴史）という視座によって、一つの国家、言語には収まり切らない歴史として1850年代から1945年までの日本の赤十字運動の実態と帝国日本の国際協調主義の可能性について解明する。本研究では、人道とは近代人特有の苦しみとともに勃興した地球規模の運動体であると定義し、日本独自の発展を遂げた人道運動という視点で、近代日本における人道概念の形成過程とその活動実態について探求した。また、従来ほとんど注目されてこなかった実務者の証言を多く収集し、組織の歴史のみでは見逃されてしまう構成要員に内在する人道的プロフェッショナリズムについて考察した。困難な時代に、日本の赤十字運動の歴史を一つの事例研究として、近代人特有の人道危機とは何かといった国籍、人種、宗教を問わない大きな歴史的問いに挑戦し、人道研究の立場から政治、経済、外交、社会福祉、環境、ジェンダー等の問題を包含する問いを投げかけ、文明の変革を促す理論の構築を目指した。

研究成果は英文学術書『Humanitarian Internationalism Under Empire——The Global Evolution of the Japanese Red Cross Movement, 1877-1945』（Columbia University Press 2024年）（第42回大平正芳記念賞）にまとめた。公益財団法人三菱財団より長期に渡り助成いただいたことに深潭なる謝意を表したい。

背景および目的

従来の赤十字の歴史研究は、日本の内外を問わず、これまで西洋中心、キリスト教中心史観に基づいて論じられ、近代国民国家の形成過程及び帝国主義、植民地政策の勃興とともに、運動が発展してきたと捉えられてきた。そのどれをとっても赤十字運動の発祥は西洋であり、富める西洋列強から貧しいその他の国々へ援助を施すという視点で研究されてきた。しかし、世界では西洋だけではなく東アジアや中東、アフリカでも赤十字運動の勃興があり、中東諸国の赤新月運動を見れば分かるように、その運動は19世紀中頃に勃興した当初から既にグローバル化していた。よって西洋中心史観で赤十字活動を分析することは、その実態を解明する点において限界があったと言える。一方、日本語圏の先行研究でも西洋中心史観の枠組みから免れず、富国強兵政策の下、対外的な不平等条約の改正等、日本が国家として列強の仲間入りをするために、その劣等意識から、まずは文明国の証として赤十字社を必要としたといった従来の国家や政治、軍事、外交の枠組みでの歴史観に基づいて書かれたものが多かった。

しかし、本研究の大きな特徴の一つは、これまで顧みられなかった赤十字の一次史料を、徹底的に発掘、分析することにあった。帝国日本の戦争、外交、災害、民衆、法秩序等の歴史を近代人にとって共通の課題であった人道（humanitarianism: jindō, the way of humanity）という枠組みで再考し、第二次世界大戦を中心とした日本の外交政策等に対しても、新たな視点を付与することができると考えた。一方で、世界史的枠組みにおいては、紛争や災害、政治、経済、外交、環境、個人、集団、ジェンダー、多様性といった様々な歴史的命題について新たな歴史認識を創生することができるものと考えた。

方法

これまで、知られていなかった歴史的事実を多角的な視点で分析するために、本研究ではマルチ・アーカイブの手法を採用した。日本、スイス、イギリス、アメリカ合衆国、アジア諸国、ブラジル等にあるアーカイブを主な調査対象とした。近代の日赤は設立当初から国際赤十字・赤新月運動の一員という性格を有していたため、多くの記録が非日本語圏のアーカイブにも残されていた。取り分け、スイスや第二次世界大戦時に敵国であった赤十字社のアーカイブにその多くの記録が残されていた。スイスに拠点をおく赤十字国際委員会（ICRC）や国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）、諸外国赤十字社のアーカイブ、ナショナル・アーカイブなどを調査した。

また、その他、海外の調査では、スタンフォード大学フーヴァー研究所、ブラジル移民史料館、サンパウロ人文科学研究所、スイス連邦公文書館、ETH Zürich、米国国立公文書館、Poster House in New York、大英図書館、英国国立公文書館等のアーカイブを調査した。

一方、国内の調査では、日赤本社、各都道府県の日赤支部、日赤看護大学及び病院、博物館明治村、防衛研究所、彰古館（陸上自衛隊衛生学校）、土門拳写真美術館、ハワイ移民資料館仁保島村、伊陸ロンサムレディ号平和記念館、和歌山市立博物館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、公益財団法人長崎平和推進協会写真資料調査部会、戦没した船と海員の資料館、防衛研究所戦史研究センター、外務省外交史料館、国立国会図書館、外務省外交史料館、アジア歴史資料センター等のアーカイブを調査した。

結果および考察

近代日本の赤十字運動は、西洋の人道思想を明治以前からあった相互扶助の伝統に取り入れ、日本独自の運動体として発展した。それは、実践的な発展を遂げ、日本人移民や植民地政策と相まってトランスナショナルに発展した。更に、日本の赤十字運動は、帝国日本の国際協調主義を表象するものでもあった。

日本赤十字社（以下、日赤）は、その前身として1877年に民間の救護団体として西南戦争の最中に創設された。しかし、その実態としては皇族の庇護の下、帝国主義国家の救護団体いわばトップダウン型の活動と、市井の人々からなる草の根いわゆるボトムアップ型の運動体であったことが判明した。刊行した英文学術書『Humanitarian Internationalism Under Empire——The Global Evolution of the Japanese Red Cross Movement, 1877-1945』（Columbia University Press 2024年）（第42回大平正芳記念賞）の第一章では、日本独特の相互扶助の精神に焦点を当て、日赤支部勃興の歴史を概観し、近代日本の市井の人々がいかにして、地域の存続と近代国家の国民としての社会的使命に目覚めていったのかについて分析した。日赤の組織の歴史として特筆すべき事象は、1919年の赤十字社連盟（現在の国際赤十字赤新月社連盟）の創設が挙げられる。帝国日本の勃興とともにこの国際機関の創設を主導することで、日赤は支部活動にルーツを持つ、自然災害や公衆衛生等の平時事業をグローバル・スタンダード化し、当時、戦時支援中心であった、欧米型の赤十字運動の伝統を覆した。1920年時点で社員数200万人を超えるなど、当時として世界最大の人道支援機関に成長した。

第二章では、戦間期日赤の人道外交及びこの時代に確立された政治的中立の概念について考察した。ナチスドイツの台頭、満洲事変の勃発、日本の国際連盟脱退という困難な時代に、日赤は徳川家達社長（徳川宗家第16代当主）を中心に、第15回赤十字国際会議を東京で開催した。満場一致で採択された東京宣言では、文民保護の規定について明記するなど、戦前期日赤の人道外交が戦後の1949年ジュネーヴ条約改正の礎になったことを証明した。第三章、第四章では、これまで論じられることのなかった越境した日本の赤十字運動について、日系移民史とともに朝鮮、満洲、ハワイ、ブラジルでの活動をケース・スタディーズとして考察した。第五章では第二次世界大戦時における連合国捕虜の救援活動について探求した。戦時日本の赤十字活動が軍部による極度の制限がある中で、ICRCや連合国赤十字社等の協力を得て、ジュネーヴ条約に則り、人道支援を届けようと試みた実態を解明した。第六章では、原爆緊急救援を中心に、日赤救護看護婦のプロフェッショナルリズムについて考察し、人道とは弛まないアクションであり、現場にこそその神髄があると論じた。また、長崎市が日赤長崎県支部とともに核攻撃に備えていた事実や日赤が原爆投下直前まで支援していた連合国捕虜の被爆の実態についても明らかにした。

今後の展望および課題

現在、本研究を日本語一般読者に向けた単著を執筆中である。また、今後の研究課題として、占領下から1960年代までのアジア太平洋地域における日本の人道活動の実態について探求する。例えば、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）の下におけるアメリカ赤十字社による日本赤十字社の組織改編政策や、日本人の旧帝国圏内からの引き揚げ事業、反核運動についてなどを、残存する一次史料群を用いて考察する。敗戦により全てを失った日本の赤十字運動の再生と戦争を放棄した唯一の平和国家として世界に類を見ない日本の人道運動の軌跡を探求する。そして、日本語、英語圏双方における日本現代史研究の足りないところを補い、両者を融合しハイブリッドな歴史叙述として新たな歴史認識の構築を目指す。最終的には、その研究成果を日英のいずれかの大学出版局より刊行し、異なる言語の壁を越えた新たな歴史認識の創生を目指したい。

(完)

単著・学術論文

- 1) Suzuki Michiko, *Humanitarian Internationalism Under Empire: The Global Evolution of the Japanese Red Cross Movement, 1877-1945* (Columbia University Press, 2024) (第42回大平正芳記念賞)
- 2) Suzuki Michiko, “The Manchukuo Red Cross Society and the Kwantung Army’s Nation-building Project in Manchuria, 1938-1945,” *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, Vol. 23, pp. 1-16 (8 December 2025)
- 3) 鈴木路子、「解題—満洲国赤十字社機関誌『仁愛』——関東軍による近代国家構築構想の表象として」、『外地いのちの資料集（十二）満洲国赤十字社『仁愛』』（金沢文圃閣、2025年12月）
- 4) 鈴木路子、「国際協調主義の危機——第十五回赤十字国際会議（一九三四年 東京開催）」、『神園』、明治神宮国際神道文化研究所、第33号、pp. 38-48、pp. 234-237、2025年5月
- 5) Suzuki Michiko, “Michiko Suzuki on Decentering the Western Humanitarian Movement: Japanese Indigenous Humanitarianism (Jindō),” *Columbia University Press Blog* (July 2024)
- 6) Suzuki Michiko, “Japanese Red Cross Society’s Emergency Responses in Hiroshima and Nagasaki, 1945,” *Social Science Japan Journal*, Vol. 24 Issue 2, pp. 347-367 (23 July 2021)

引用文献

- 1) Abel, Jessamyn R. 2015, *The International Minimum: Creativity and Contradiction in Japan’s Global Engagement, 1933-1964*. Honolulu: University of Hawai’i Press.
- 2) Akira Iriye, *Cultural Internationalism and World Order*. Maryland and London: The Johns Hopkins University Press, 1997.
- 3) Akira Iriye, *Global Community: The Role of International Organizations in the Making of the Contemporary World*. Berkeley: University of California Press, 2004.
- 4) Kim, Sonja M. 2019, *Imperatives of Care: Women and Medicine in Colonial Korea*. Honolulu: University of Hawai’i Press.
- 5) Moorehead, Caroline 1999, *Dunant’s Dream: War, Switzerland and the History of the Red Cross*. London: Carroll & Graf Pub.
- 6) Sarah Kovner, *Prisoners of the Empire: Inside Japanese POW Camps*. Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 2020.
- 7) Sho Konishi, “The Emergence of an International Humanitarian Organization in Japan: The Tokugawa Origins of the Japanese Red Cross.” *The American Historical Review*, Vol. 114. Issue 4 (October 2014): 1129-1153.
- 8) Young, Louise 1998, *Japan’s Total Empire: Manchuria and the Culture of Wartime Imperialism*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press.